「パパワ？」
——子どもの「ワ」を含む質問について——

宮　田　Susanne

Wh–Questions of the Third Kind:
The Strange Use of Wa–Questions in Japanese Children

Susanne Miyata

リョウ君の発話から：

2；3：16「コレ　ワ？」（ダンプカーの絵を指さしながら）

2；2：25「パパ　ワ？」（父親のいないとき）

このような質問，（以下「ワ質問」と省略）は，日本語を獲得している子どもによく使われる。子どものことばの一つの特徴ともいえる。

欧米の言語にはこのワ質問のような構造はない。それは，文の主語とトピック（topic）との差が表現されていないためである。例えば英語の子どもが，日本語のワQにあたる質問をするためには，疑問詞を使って「where papa ?」のような Wh–Question を用いるか，あるいは「papa school ?」のような Yes–No Question を使うほかはない。「and papa ?」は直訳で「そしてパパ？」の意味を表しているので，「パパワ？」のように，いきなりには使えない。

これに対して，日本語で育った子どもには「パパドコ？」，「パパガッコー？」，そして「パパワ？」という三つの表現があるわけである。

通常発話を記録する際には，ワQは Yes–No Question の一種として分類される（大久保 1967，伊藤　1990）。そのため，安易な一般化はできないが，ワQは非常に早い時期に現れるようである。筆者が調べた4人の子どもの場合でも，ワQを含む質問は「ナニ？」や「ドコ？」と同様に，早い時期に頻繁に現れる質問であった。

ところで，大人が「ーは？」というワ質問と同じ形で質問するとき，それは質問の一部を省略（ellipsis）したものであり（Martin　1975），その省略された部分は場面や分脈に含まれて

いる。質問された相手が質問の主旨を十分理解できずに聞きなおすと，質問者は完全な疑問文に言いかえることが多い。明らかに大人にとっては，「花子さんは？」「だれが？」「私の？」等の質問はすべて同じパターンのものである。

しかし，子どものワ質問の使い方を詳しく調べると，大人の質問とは異質である。このワ質問は省略された文ではないことがわかる。筆者はこれを説明する仮説として，子どもの初期のワ質問においては，「ワ」は助詞ではなく疑問詞として使われていると考える。

この仮説を確かめるために，子どもの自然なことばの使い方を観察することは必要である。ここで，一人の観察した子ども（リョウ君）の発話を調べ，ワ質問に関するデータの分析をする。

① 子どもの質問の意図が伝わらず，母親がきき返しても，省略されているはずの動詞などが子どもの発話に現れない。次の例では明らかになるが，リョウ君の質問を母親が聞いてあげない場合や誤解した場合であっても，リョウ君は質問の形を変えない。

リョウ君２；２：25（このセッションで，ワＱが初めて数回使われる）
R：「ココ ワ？」　カーテンのほうを見ながら
R：「コレ ワ？」　カーテン，そして母親を見る
R：「コレ ワ？」　母親を見る
R：「ママ コレ ワ？」母親を見る
R：「コレ ワ？」　母親を見る
M：「ママの。」
R：「コレ ワ？」　カーテンを引っぱりながら
M：「カーテン。」
R：「ガテン？」　母親を見るが，母親は反応しない

② ワ質問を使いはじめる子どもの文の構造を調べると，二語文は使えるようになったが，三語文を使うのはまだ不安という状態にあることが明らかになる。リョウ君が上記の例と同時（２；２：25）に使った文の例：

「コレ チュケタ。」　(付けた)
「ママ アカナ。」　(魚)
「キンギョ サカナ チヤウ ヨ。」(金魚だ，魚と違う。)
「アレ ママ ノ。」

「アレ ダメ ヨォ。」
「パパ マイダ。」　　(「ただ今」と言う)
「アティタ デテ ナイ ヨ。」　(おしっこ)

つまり，二語文が現れてから最初のワ質問がすぐ使用されており，文法面の発達はまだ省略が可能なほど進んでいない状態である。

③　ワ質問以外の文には「ワ」がまだ使われていない。
リョウ君の場合では，2；2：25以降に「ワ」が時折特定の表現（「コレワイイ。」等）に現れるが，生産的（productive）な表現は2；8位にしか見られない。それに対して，ワ質問は2；2から現れ，2；3以降にはよく使われている。

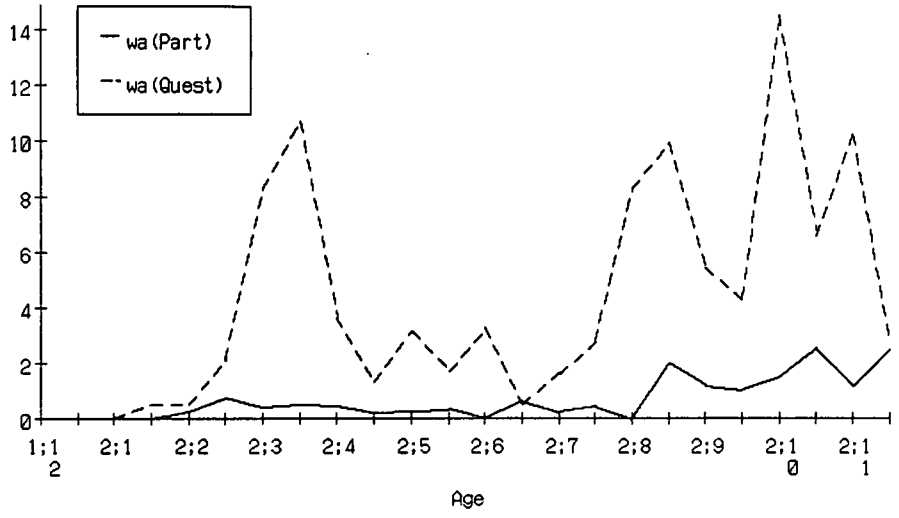

図1　100文に当たるワ質問数とそれ以外の「ワ」の使用数（リョウ君）

④「ワ」以外の助詞の使用を見ると，ワ質問が出現する時期には，所有を表す「ノ」が「パパノ。」などの形で頻繁に使われるが，それ以外の助詞はまだ現われていない。「ガ」と「ニ」は2；2の中頃に現れるが，まだ生産的には使われていない。

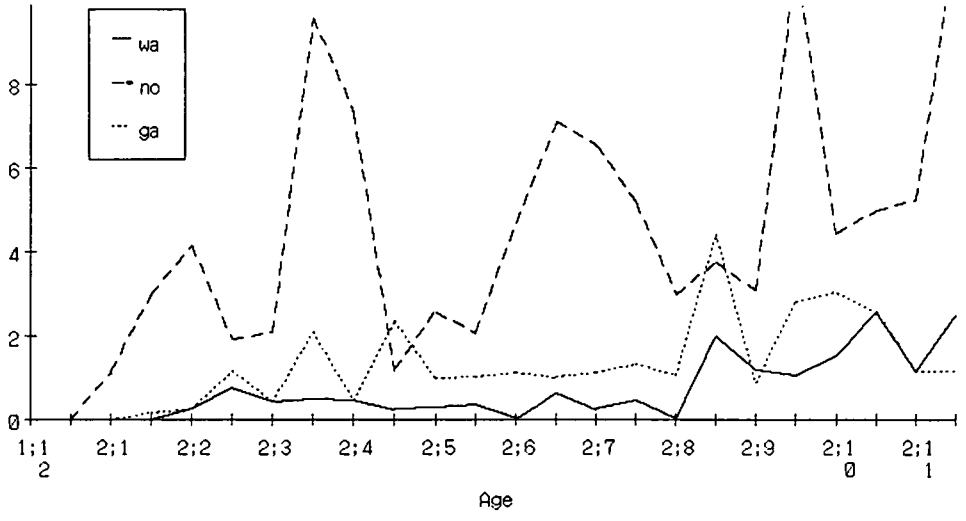

図2　100文に当たる助詞の「ワ」「ノ」「ガ」の使用数（リョウ君）

⑤　疑問詞のドコやナニが出現する前に，ワ質問がすでに使用されている。上に述べたように，場所を尋ねるのに，ドコなどを含む疑問文のほかに，Yes–No Question やワ質問も使用しており（ガッコウ？・ドコ？・パパワ？），名前をきく質問にも同じ三つの形が見られる（ブブ？，ナニ？，コレワ？）。

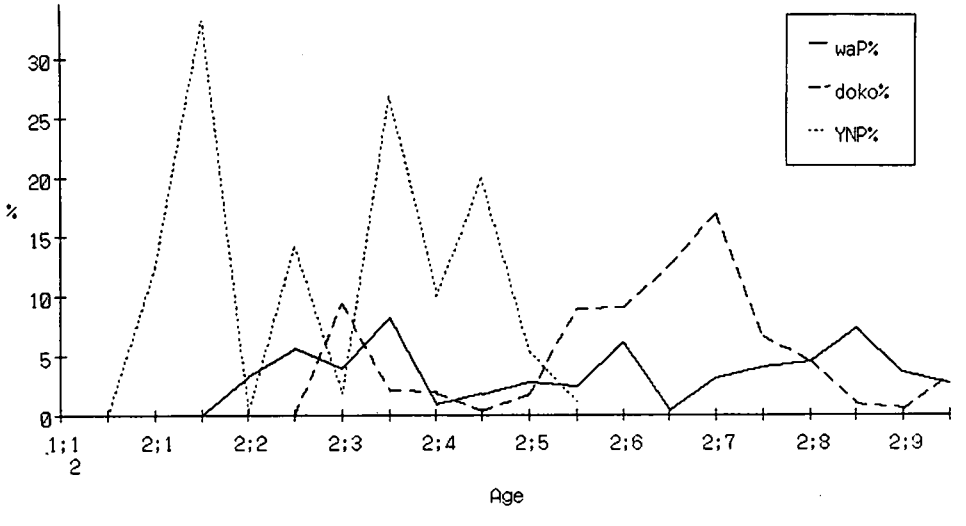

図3　場所に関する質問の形とその割合（リョウ君）

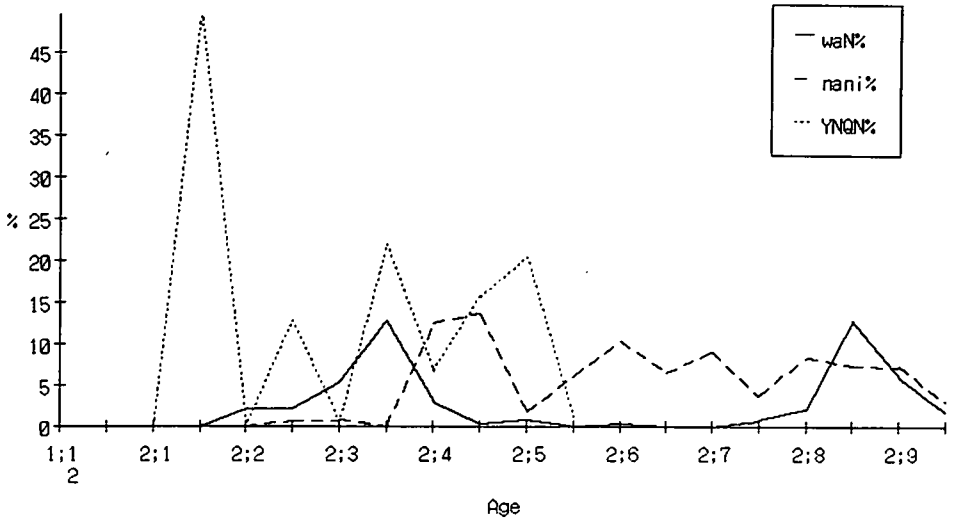

図4　名前に関する質問の形とその割合（リョウ君）

この三つの形の出現時期と使用頻度を比較してみると，リョウ君のデータの場合では，Yes–No Question が最初に現れ，よく使われていた。その次にワ質問が出現し，最後に疑問詞が獲得されていた。

すなわち，場所や名前に興味を持つようになった時，はじめは Yes–No Question で尋ね，より一般的に疑問詞で尋ねるようになる前に，ワ質問を使用するようになると考えられる。

まとめてみると，2歳頃のリョウ君にとっては，ワは助詞ではなく，一種の疑問詞であった。このことは一般的に見られる現象であるかどうかは，多数の子どもの発話データを調べない限り判らないが，今後の研究の課題である。

しかし，大人のことばと同じ分類法を，そのまま子どもの発話に当てはめられないことが，今回の研究で明らかになったと思う。

子どものことばは，大人のことばと異質なものである。長い獲得過程の中で徐々に大人のことばに近づくが，最初から同じ構造を持っているわけではない。一語発話の時期から複文などを使いこなすようになるまでは，数年もかかる。その間，ごく簡単な構造が複雑な構造へと発展していく。

したがって，言語発達の初期のことばを調べるとき，大人の文法に基づいて，分類すること，すなわち簡単なパターンを複雑に分類することは適切な方法ではない。むしろ，子どもが実際にしゃべっていることばを観察し，その発話とその中に現れる構造を，「大人の文法の眼鏡」を掛けずに肉眼で見ることが大切である。